



現代っ子は手先が不器用？

*子供と手の文化を考える



テレビゲームが遊びの主流を占めるようになったいまの子供たちに、お手玉、おはじき、メンコにビー玉といっても、「いったいどんな遊び？」という答えが返ってきます。

それもそのはずです。朝起きると、寝間着は親にたたんでもらい、洋服のボタンさえかけようとせず、朝食ができあがるまでテレビを見て過ごす。いや、靴のひもさえ結べないいまの子供たちの生活からは、すっかり「手」が奪われてしまっています。

元来、日本人は手先が器用でした。その器用さがハシやそろばん、折り紙、お手玉などの、日本独特の「手」の文化、を生みだしました。

しかし、最近ナイフでリンゴの皮が上手にむけない、ハシの使い方がうまくないといった手先の不器用な子供が増えているといわれます。

間もなく新入学（園）シーズン。子供たちの「手」について考えてみましょう。

手は人間の文化の礎

「リンゴの皮がむけなくとも、小刀で鉛筆が削れなくても、日常生活に支障がないのだから、いいじゃないの」とお考えのお母さんもいらつしやることでしょうか。ところが、人間の手をつかさどっているのは、じつは大脳の中枢神経なのです。

人間の体は、使われないと退化してしまふといわれています。骨折をされた方は経験されていると思いますが、骨折の治療で安静にしていると、折れた部分がやせ細ってしまいます。これは廃用性萎縮といっていますが、これは脳の神経細胞にもいえることなのです。

日常生活の中で手を使わせよう

ぞうきんがけはとでも手先を使います。そして食事のあとかたづけをさせるのもいいでしょう。「きょうは自分のお皿を洗ってね」と、お皿の一枚や二枚、割れる覚悟でやらせれば、子供は喜んでやるものです。

生卵をうまく割れないという子供が多いのも、お母さんがやらせないからです。たいいていの子供は、生卵を割ることに興味をもっています。ところが、「台所が汚れちゃうわよ」とやらせないお母さんがいますが、ときには少々散らかしてもいいと、心を寛大にしたいいものです。

独立心を育てる効用も

朝起きて、パジャマからふだん着に着替えるときも、「どうしてさつとできないの」と、手伝ってしまふのは考えものです。

多少の時間はかかっても、ボタンをひとつひとつ止めることで、子供は手先を働かせ、何よりも「自分でできるのだ」という自己認識を、手を介して実感するのです。

そして、それがやがて独立心へとつながっていく大切な芽を育てることに

が考えられるのです。進学率が高くなり、「勉強／勉強」と叱咤されているいまの子供たちは、知識のすばらしさにおいてはすばらしいものをもっていますが、人間らしい知性や情緒が輝き安定しているかというと、ちよつと首をかしげざるをえません。

失われつつある手を動かす遊び

家事の手伝いをしないのが当然のようになつてしまつた子供たちは、だんだんと手を使う作業がおつくうになつてしまいます。ましてや、昔なつかしいメンコ（パッチとも呼ばれる）、おはじき、お手玉、あやとりなど、手先

もなるのです。

「目は口ほどにものをいう」と昔からいいますが、手は口ほどにものをいう——そんな気持ちを、わたしたち大人は、子供たちに対してもたなければいけないようです。

不器用な子供が増えてきている？

「児童の日常生活に関する調査」より
子供たちの手先の器用さが失われつつあるといわれて久しいのですが、実際はどうなのでしょう。

文部省が行つた「児童の日常生活に関する調査」をご紹介します（昭和五十九年三月調査。対象は小学校二百十八校、三年生と六年生、計一万五千四百六十一名の児童）。

実際にうまくできるかどうか子供たちに実技調査をした結果を見てみると、
●「ナイフでリンゴの皮をむく」では？

「うまくむけている」、まあまあうまくむけている」児童は、全体の三五・六％ですが、「むき方が適切である（ナイフの刃先をおさえコントロールしながらむく）児童に限ると、二八・六％という結果です。
つまり三人のうち二人は、まったくむくことができないか、できても手元がぎこちなく危なっかしいということになります。

●「ぬれタオルを絞る」では？



なに作ってんの…？（中央保育園で）

■「小刀で鉛筆を削る」実技調査の結果（対象165人）（％）

削り口	左のいずれの図とも異なる削り方となつていない者	計	
		しんが削られており、鉛筆として使用できる	しんが削られず、鉛筆として使用できない
削り口の長さ、削り面のなめらかさは、だいたい鉛筆削り器で削つたときと同じようになっている者	9	35	19
切り口の長短はあるが、削られた面は、だいたいなめらかな者	37		
計			100

＜資料＞ 文部省「児童の日常生活に関する調査結果」より。（調査＝59年3月、調査対象＝小学校15校の第3学年児童）

を使つて自分で工夫する遊びをあまりしなくなつたいまの子供たちの世界には、手を鍛練する機会が少なくなりつつあります。
それでは、どうしたらいいのか？——残念ながらすぐ効きめのある「処方せん」はありません。
もちろん、ピアノや絵や書道習わせるということも、ひとつの方法でしょうが、それよりも大切なことは、ふだんの生活の中で、できるだけ子供たちに手を使わせることです。
というのも、大脳の微細構造は、三歳でほとんど成人のそれに等しくなり、十歳前後では、大脳の重さも大人の九〇％を超えるようになるからです。まず家事の手伝いから始めるのがいいでしょう。

「かたく絞れている」、「だいたいわらわらわら絞れている」児童は九五・四％ですが「絞りが適切である（タオルを前後にして逆手でねじる）」児童に限ると、五一・四％と、約半分の子供たちができなくなつてしまふようです。
このほか、実技調査の結果が良好であったものをあげると、「はさみで紙を丸く切りぬく」（七二・四％）、「ひもをちよう結びで結ぶ」（六四・六％）、「小刀で鉛筆を削る」（六〇・一％）、「ハシを正しくもつ」（四五％）という結果が出ています。